

(それは僕の台詞だと思うけど)

臨也はものすごく面倒な人間らしい、と今知った。しかも自分は今回さんざん振り回されている。恋人ごっこは飽きたと臨也が言った癖に、どうやらそれは帝人が続けることが前提で、つまり終わるつもりなどなかったらしい。

なるほど、領いたときに驚いた様子を見せたわけだと今なら思う。

こうなると、あの女性二人と会話をしていたのも、帝人が臨也と女子高生とのキスシーンを目撃したのも、もしかしたら臨也にとつては計算内だったのかもしれない。それもあり得る話ではある。

(……っていうか、それで間違いない気がしてきた)

帝人の気持ちを自覚させて、それこそ最初は楽しんでいただけではなからうか。今までの恋人や取り巻きたちと同じように。彼が自分を好きだとしても、その事実に気づいていないなら、楽しむ余裕も十分にあるだろう。

キスシーンを目撃したのは偶然のはずだが、臨也ならばあの日、帝人があの道を通ることを予測できても不思議ではない気がする。そうやって嫉妬させて、強く気持ちを自覚させて、その上で恋人ごっこは飽きたと告げた。今まで臨也の恋人だった女性たちはそうすれば皆、縋ったのかもしれない。彼が好きだから、別れたくないのだ、と。だから帝人も同じように縋るはずだと予想する。そうして縋ってきたら、先ほどの言葉通り、条件次第で別れないでやっても良いと、そう告げるつもりだったのかもしれない。

けれど予想は外れて、自分は領いた。だって自分は臨也の今までの恋人とは違う。終わると知っていたし、終わらなければならぬとも思っていた。だから。

(でも結局、終われない)

今まで相手とは反応が違ったからか、もしくは他に理由でもあるのか、臨也が自分に執着めいた、恋愛感情かそれに近い何かを抱いているのは、たぶん真実だ。けれど、それがいつまで続くのかはわからない。だって彼は、折原臨也なのだから。

「恋人ごっこは飽きたことだし、これからは正式に恋人ってことでよろしくね」

につこり。浮かべる笑みは、傲慢で、それなのに、それだからこそ、ひどく魅力的だった。思わず顔が熱を持つ。

「何でそこで赤面するかなあ。帝人君って本当に予想外の反応するよね。そこがかわいいけど」

言いながら、臨也が再度ぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。苦しいと文句を言うことも諦めて、その腕に身をゆだねた。

いつか、彼は飽きるのかもしれない。

彼は自分に恋していないのかもしれない。

そんな風に、抱きしめる強さを幸福に変換する傍らで思う。

(覚悟、しないと)

改めてそう思う。彼に恋する覚悟。いつかこの恋が終わる覚悟を。

この恋が終わる日が、きつといつか来るのだろう。